下伊場野窯跡群（しもいばの）

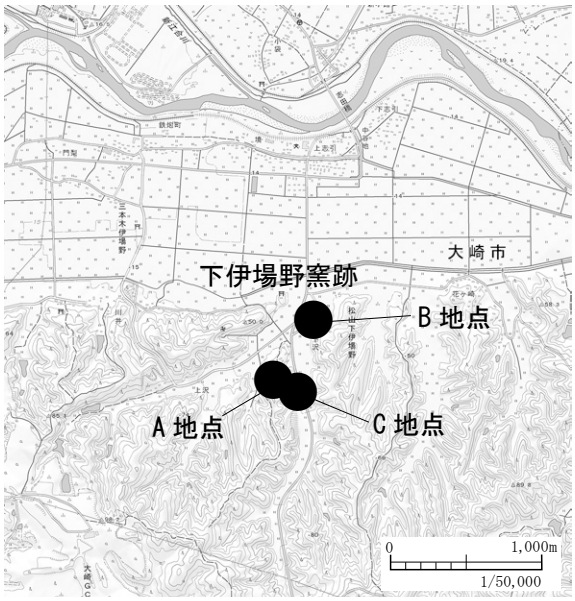
多賀城跡調査研究所　古田和誠

所 在 地　宮城県大崎市松山下伊場野字下沢・三本木伊場野字坂ノ森

立地環境　鳴瀬川南岸の大松沢丘陵北斜面。標高30 ～ 35 m

発見遺構　瓦窯、瓦・須恵器窯、竪穴建物、土坑

年　　代　８世紀前半



第１図　下伊場野窯跡の位置

遺跡の概要

下伊場野窯跡群は、大崎市の旧松山町と旧三本木町の境界付近に所在する窯跡群で、大崎平野の南側を画する大松沢丘陵の北斜面に立地する（第１図）。直径 600 m程の範囲にＡ～Ｃ地点の窯場がある（第２図）。周辺には、８世紀中頃の須恵器を焼成した次橋窯跡が本窯跡群の 1.3km 東にある。また、多賀城跡からは北へ直線距離で約 23km ある。

本窯跡群で多賀城第Ⅰ期の重弁蓮花文軒丸瓦 116 が採集されたことをうけ、平成５年に多賀城跡調査研究所が発掘調査した（文献４）。調査では、Ａ地点で地下式窖窯３基と窯操業時より新しい竪穴建物１棟、土坑４基が検出され（第２図）、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦、須恵器（坏・高台坏・蓋・鉢・甕・壺）、土師器などが出土している。

窯の規模・構造（第２図・第１表）

北西に張り出した約 20 m四方の斜面に３基の窯が約５m間隔で並ぶ。１・２号窯は瓦窯、３号窯は瓦陶兼業窯である。なお、昭和 30 年代の道路工事で消失したと伝えられる２基を含めて、５基の窯がほぼ同時期に存在したと推測されている（文献４）。

瓦窯　１・２号窯は窯体長 6.8～7.0 m、焼成部最大幅 1.4～1.6 m、燃焼部最大幅 1.0～1.2 mである。いずれも床面は２枚あり、１次床の傾斜角度は 10～30° で、奥壁に向かって急になる。煙道は、残存している１号窯では奥壁から約 20 ㎝内側にあり、直径約 55cm の円筒状で、底面から垂直に立ち上がる。前庭部の形状は左右に幅が広くなる方形のものである。１号窯の燃焼部から前庭部の右壁沿い、２号窯の前庭部右壁沿い排水溝が付設されている。

瓦陶兼業窯　３号窯は窯体長 5.0 m、焼成部最大幅 1.5 m、燃焼部最大幅 1.0 mで、瓦窯と比べて小型である。床面は２枚あり、１次床の傾斜角度は 10 ～ 30° で、奥壁に向かって急になる。

出土遺物（第３図）

瓦は軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦が出土しており、大部分は平瓦・丸瓦である。胎土に海綿骨針を多量に含むのが特徴の一つで、須恵器にもみられる。

軒丸瓦は、周縁蓮子間に区画のある重弁蓮花文軒丸瓦で、蓮弁と間弁の外に凸圏線が巡るもの（第３図１）と巡らないもの（２）がある。前者は多賀城分類 116 に該当し、後者は同笵か判別できないが多賀城分類 114 に極めて類似する。

軒平瓦は、瓦当文様は手描き二重弧文で、顎面文様は下端に二本の平行沈線だけを描くもの（５）と、

その上部に鋸歯文や波状文を描くもの（３・４）がある。多賀城分類では 511ｃタイプに該当する。

丸瓦は、粘土板巻き作りが主体で、無段のもの（６）と削り出し有段にしたものがあり、粘土紐巻作りで有段のもの（７）が少量伴う。多賀城分類では、丸瓦ＩＡ類、丸瓦ＩＢ類、丸瓦ⅡＢ類に該当する。丸瓦の凸面に「小田郡□（丸カ）子部建万呂」がヘラ書きされた文字瓦（10）があり、「（丸カ）子部建万呂」は、多賀城跡から出土した「小田建万呂」や多賀城廃寺出土の「口丸子部建万呂」の文字瓦と同一人物であること、「小田」は郡名であることか明らかになった（文献４）。この人物は、瓦製作に関わった集団の中で上位に位置したと考えられている（文献３・４）。

平瓦は、桶巻き作りによる平瓦円筒を一枚分に分割した後に、布を敷いた凸型調整台においてナデ→調整の叩き→ナデ（省略の場合がある）の順に調整して仕上げたもの（８）である。多賀城分類では平瓦ＩＣ類ｂタイプに該当する。調整台の凸面に文字を彫り出し、平瓦の凹面に陰刻状の圧痕となって文字が認められもの（９）が多く、完形の平瓦でみると 21 点のうち 19 点で確認される。文字には、「常」、「下」、「今」があり、瓦の生産を負担した東国の国名や瓦の製作にかかわった集団または人物を表している可能性がある。

須恵器は坏（第４図１～５）、高台坏（11・12）、蓋（６～10）、鉢、壺、甕などがあり、坏・高台坏・蓋などの食器類が主体を占める。坏は切り離し技法はヘラ切りと推定され、底部から体部下端に回転ヘラケズリによる再調整が行われる。蓋は口縁部にかえりをもたず、リング状の摘みをもち、天井部に回転ヘラケズリされている。

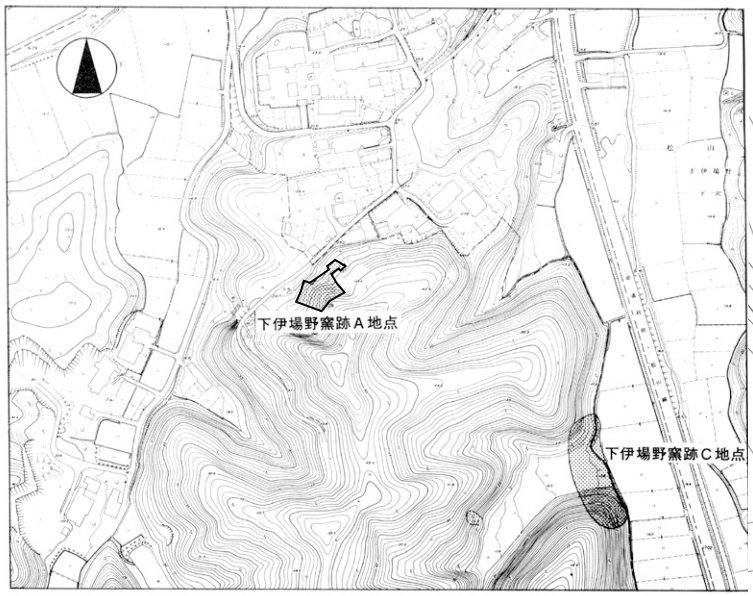
窯跡群の年代

瓦の年代は、外区に凸圏線が巡る八葉重弁蓮花文軒丸瓦 116 が様式的に古いこと、多賀城創建以前の形態・技法を踏襲した丸瓦ＩＡ類が主体を占めることなどから、多賀城第Ⅰ期でも古い段階に位置づけられている（文献４）。また、第Ⅰ期で最も古い様相をもつ東松島市亀岡遺跡出土瓦群との密接な関連が指摘されている（文献５）。

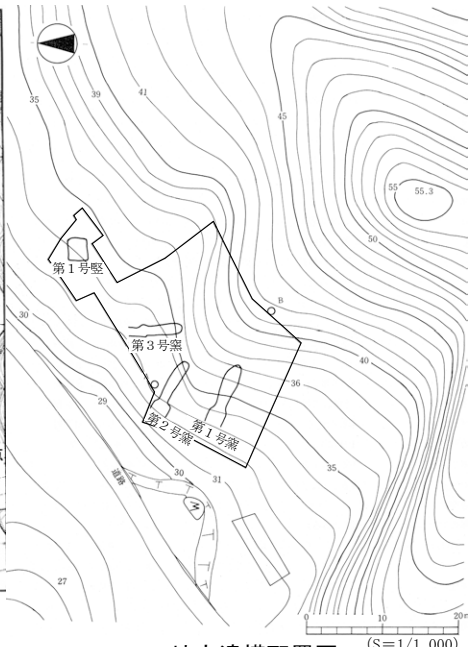
本窯跡群は、現在のところ第Ⅰ期の窯跡群で最初期に位置づけられている（文献４・６）。また、色麻町日の出山窯跡群Ｃ地点では、本窯跡と同一の凸型調整台による文字圧痕「常」「今」が存在することから、調整台を携えた本窯跡の工人が日の出山窯跡群に移動したことがわかっている。

関連文献

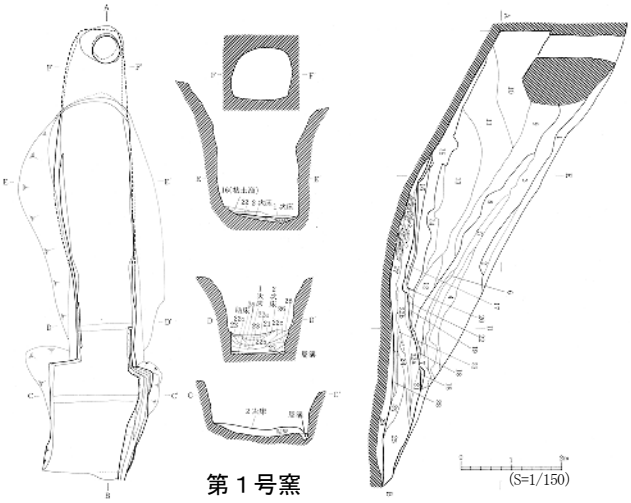
1　櫻井友梓 2007「多賀城創建期の須恵器」『考古学談叢』東北大学大学院文学研究科考古学研究室須藤隆先生退任記念論文集刊行会
2　櫻井友梓 2009「多賀城周辺地域の須恵器窯構造」『宮城考古学』第 11 号
3　進藤秋輝 2004「多賀城創建期の造瓦活動」『考古学の方法』5
4　宮城県多賀城跡調査研究所 1994『下伊場野窯跡群』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 19 冊
5　宮城県多賀城跡調査研究所 2004『亀岡遺跡Ⅱ』多賀城関連遺跡発掘調査報告書第 28・29 冊
6　吉野　武 2017「多賀城第Ⅰ期の瓦窯跡の特徴と変化」『第 43 回　古代城柵官衙遺跡検討会　資料集』



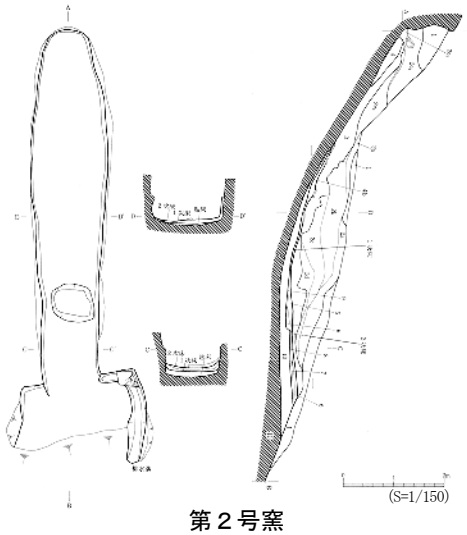
Ａ地点・Ｃ地点の位置



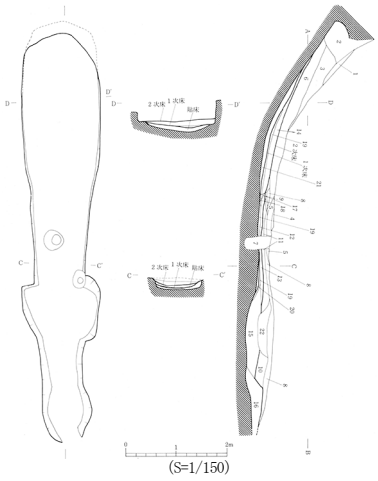
Ａ地点遺構配置図



第１号窯



第２号窯



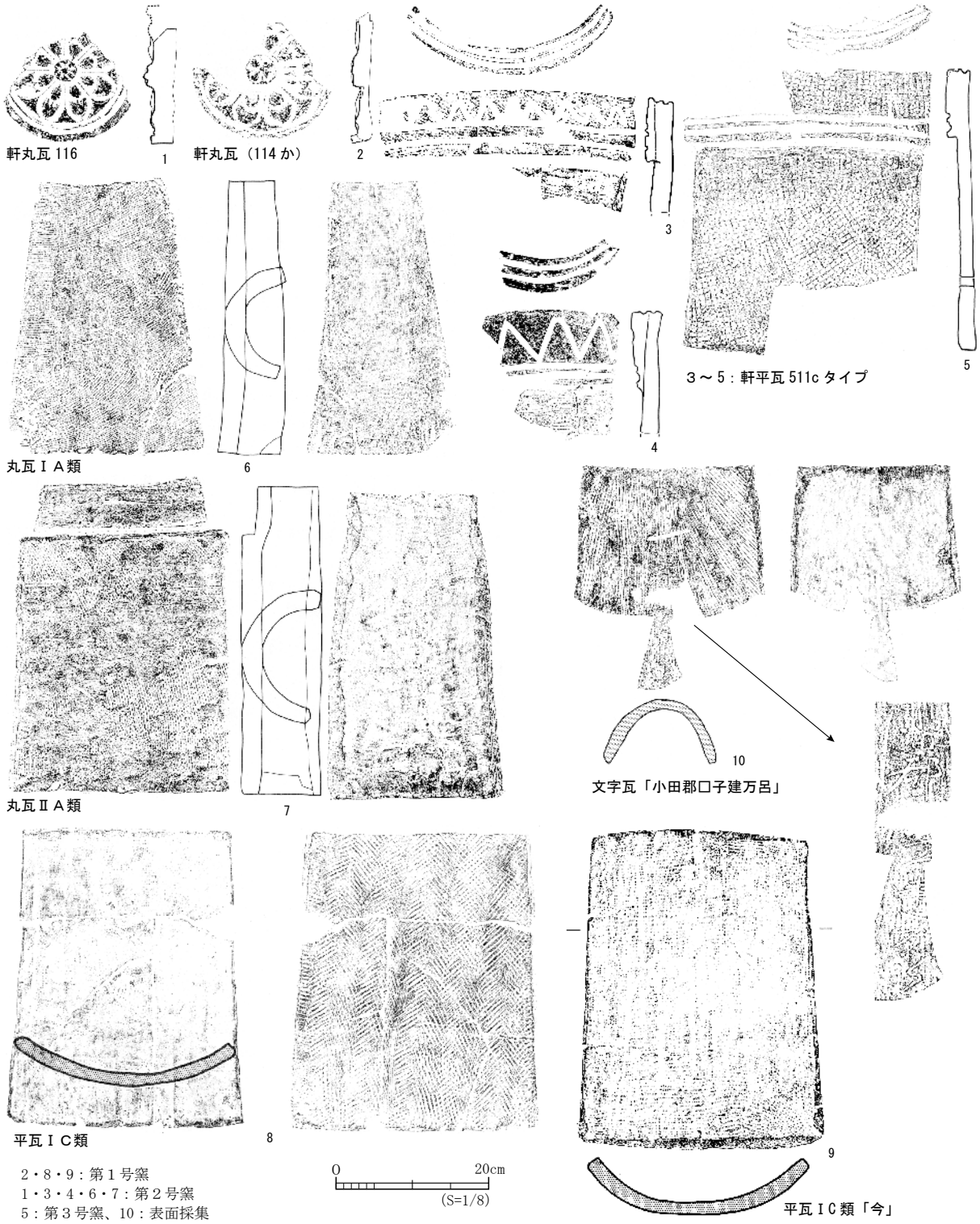
第３号窯

第２図　Ａ地点の窯（文献４から作成）

遺構名	構造	煙道	全長	焼成部				燃焼部				窯体長	前庭部			製品	備考
				長さ	幅	床面	傾斜	長さ	幅	床面	傾斜		長さ	幅	形状		
第１号窯	地下	直立	(9.0)	4.8	1.6	2 枚	15～30°	1.9	1.2	2 枚	平坦	6.8	2.3	2.0	長方形	瓦	排水溝有り、側壁補強（スサ入り）
第２号窯	地下	直立	(8.5)	5.3	1.4	2 枚	15～30°	1.6	1.0	2 枚	平坦	7.0	1.6	2.1	長方形	瓦	排水溝有り、側壁補強（スサ入り）
第３号窯	地下	直立	6.3	3.3	1.5	2 枚	10～30°	1.9	1.0	2 枚	平坦	5.0	1.1	1.4	方形	瓦・須恵器	排水溝有り、奥壁抉込み

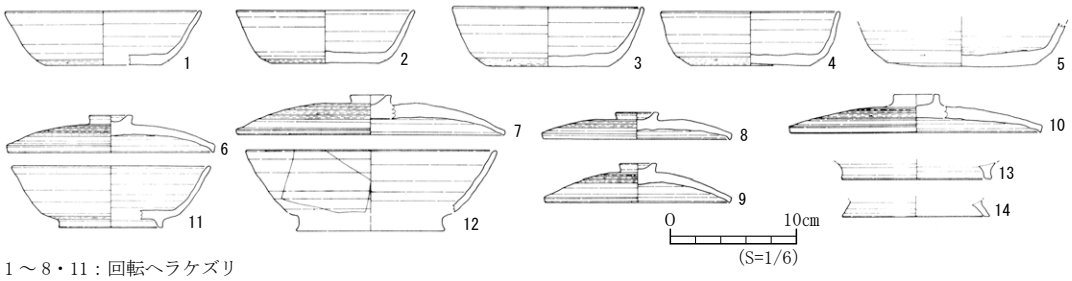
※長さの単位：m。（ ）は残存長。床面の傾斜等は１次床で記載

第１表　窯の構造と計測値（文献４から作成）



2・8・9：第１号窯
1・3・4・6・7：第２号窯
5：第３号窯、10：表面採集

第３図　下伊場野窯跡群の主な出土瓦（文献４から作成）



1～8・11：回転ヘラケズリ

第４図　下伊場野窯跡群Ａ地点第３号窯出土須恵器（文献４）